航空ファン
KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR
ハインケル
He111

☆特集☆
定期運航を開始する輸送航空団のC-1
ベトナム戦に投入されたB-52採点簿
新連載・ソ連軍用機の“カレンダー”

'75 MARCH 3

BUNRIN DO JAPAN $3.30

No.5 C-1 in flight, "touch and go" training at JASDF Iruma base.

入間基地でタッチ・アンド・ゴー訓練中のC-1 1号機。

C-1輸送機は今春3月までに7号機(量産3号機)が輸送航空団に納入されることになっており、1月からはいよいよ本機による運用が開始される。写真上はすでに物料投下や空挺隊員降下などのテストを終えて、晴れの就役にそなえているC-1の4号機と右は現在定期運航路線の主力であるYS-11輸送機。写真下はC-1　2号機の操縦席。テストのため機長席(左側)の操縦輪やフラップ操作レバーの目盛りの一部が変っているが、そのほかは量産型と同一である。

百里基地に到着したRF-4E

JASDF's RF-4Es (No.1 & 2) arrive from St. Louis at JASDF Hyakuri base, 3 Dec. 1974

No.2 RF-4E from St. Louis just reaches Hyakuri base via George, Hickam and Anderson, Guam AFB

去る12月3日，百里基地に到着した航空自衛隊の新型偵察機RF-4Eの1，2号機。マクダネルダグラスのセントルイス工場で組立てられ，現地で防衛庁側に引渡されて，米空軍の手でジョージ，ハワイのヒッカム各基地およびグァム島のアンダーソンを経由して百里基地に空輸されたもの。この3月までに14機のRF-4Eが，偵察航空隊の先遣隊がおかれている百里基地に到着する予定である。

JASDF's T-2 trainers (No.1 & 4) from Gifu base
flying over mountainous central Japan.

In flight is the T-2 trainer equipped with two Sidewinder AAMs on her wing tips.

前ページと同じく，飛行テスト中のT-2の1号機，両翼端にサイドワインダーAAMを装備して（下）

Lightning F. Mk2A of RAF No.92 Sq. Photographed at Gütersloh Air Base, West Germany (Photo: AAPP)

西ドイツのギッテルスロー空軍基地に駐留するイギリス空軍のライトニング戦闘機。写真の機体は第92スコードロン所属のライトニングF.Mk2A（XN781）。

Lightning F.Mk2A of RAF No.92 Sq. (Photo: AAPP)

写真上も前ページと同じく第92スコードロンのライトニングF-2A（XN781）。西ドイツの

ニング部隊は第92と19スコードロンで，ともにライトニングの生産二つめのタイプF.Mk2

↑垂直尾翼に画かれた第19スコードロンのエンブレム。➡第92スコードロン所属機の機首側面のマーキング。⬇離陸する練習型のライトニングT.Mk4。第19スコードロン所属の1機。

Nose markings of No.92 Sq. aircraft (Photo: AAPP)

西ドイツ空軍のF-4F

F-4F Phantom of a West German AF (Photo: AAPP)

西ドイツ空軍が[illegible]機受領することとなった[illegible]主翼前縁スラット付きのF-4F。昨年初めから引渡しが開始されて、すでに本機による最初の飛行隊が編成されているが、これも同飛行隊所属の1機。

レベル1/32スケール有名機シリーズ

…（ri）nl Revelldom
素晴らしい模型 この楽しさ!

ビッグ1/32双発戦闘機のだいご味。

■レベル1/32スケールシリーズには、このほか
● F-4Jファントム ¥2,000
● メッサーシュミットMe262A ¥1,000
● デハビランド モスキート ¥1,500
● P-38J ライトニング ¥1,500
の双発機がそろっています。つづいて、
● F-4E ファントム
● メッサーシュミット Me262B
の発売を計画しています。

ッサーシュミット Bf-110G-4
H-250 1/32
¥2,300

ブリストル ボーファイタ MK-IF
H-251 1/32スケール 全長39.5cm 全幅55.3cm
● ¥2,300

'75レベル総合カタログ全44頁カラー刷りのデラックス版
● お求めは模型店でどうぞ――1部¥300
● 当社へ直接お申し込みの場合は、
¥300＋送料¥100を切手でお送りください。

レベルカラー

グンゼ産業㈱レベル部 東京都千代田区神田錦町3－17
TEL 294－4141㈹

ソ連空軍のMiG-19戦闘機

USSR MiG-19 photographed at a War Museum in USSR (Photo: J.F. Denis)

100機目のトムキャットが完成

100th F-14A Tomcat in test flight, Calverton.

ニューヨーク州カルバートンのグラマン工場で完成した100機目のF-14Aトムキャット。301機の生産が予定されているF-14Aはただいま月産5機のペースで生産が進められており，このほど100機目の機体が完成，同工場に隣接するテスト場で飛行テストを行なった。写真は飛行テストで離陸するところ。

F-14A Tomcat, Grumman pride

〔上〕前ページと同じくこのほどカルバートンで完成した100機目のF-14A。F-14Aはすでに第1戦闘飛行隊〈VF-1〉と第2戦闘飛行隊〈VF-2〉の2個の実用部隊〈各24機装備〉が編成されて，空母エンタープライズに配属され，フイリピンから東南アジア方面の洋上に遠征中である。〔下〕艦上で訓練中のVF-1所属のF-14A。

C-5AのICBM発射テストと A-7のLVRJ飛行テスト

Minuteman ICBM drop tests, Pacific Ocean, 24 Oct. 74.

LVRJ (for Navy) in flight tests, Point Magu

〔上〕去る10月24日，太平洋上で行なわれたC-5AからのミニットマンICBM（大陸間弾道ミサイル）の空中発射テストの模様。後部貨物扉からミサイル本体と容器が落下傘で引出されるところで，このあと別の落下傘がミサイルを点火高度まで降下させた。

〔下〕LTVが米海軍用に開発している推進装置LVRJ（ロー・ボリューム・ラムジェット）の飛行テスト。A-7の主翼下に吊されているのがそれで，写真は12月2日，カリフォルニア州ポイントマグー基地で初飛行テストのときのもの。

ミラージュF1/M53が初飛行

〔上・下〕このほどフランスのイスルにあるテストセンターで初飛行したミラージュF1/M53の1号機。初飛行は約1時間にわたって行なわれ，到達高度は12,500m，マッハ1.32の速度を出した。写真下はダッソー・ブレゲーの工場からロールアウトしたときのスナップ。

Mirage F1/M53 makes debut, Istre, France

〔上〕前ページと同じく初飛行したミラージュF1/M53の1号機。同機はSNECMA M53エンジンを積んだミラージュF1の輸出型。機首には最新型のトムソンCSFシラノ4捜索追尾レーダーを積んでおり，F1よりやや太いものとなっている。1号機は今年の夏ごろまで150時間の飛行試験を行なう予定である。

〔下〕10月28日にイストルで初飛行したスーパーエタンダールの原型1号機。同機は海軍の艦上攻撃機エタンダールの後継として開発中のもので，アター8K50ターボファン・エンジン（離陸推力11,000-lb）装備。電子装備も新しいものにして攻撃・航法能力も向上されている。1時間10分にわたる初飛行ではマッハ1.18を出している。

初飛行したスーパーエタンダール

Super Etendard, first flight, 28 Oct. 74, Istre, France. Mach 1.8 recorded.

西ドイツに駐留する英空軍のライトニング

F. Mk2A of No. 92 Sq., RAF

ライトニング戦闘機を装備するイギリス空軍のスコードロンは，現在No.5，11，19，23，29，56，92の7個スコードロン。このうちNo.19と92はライトニングのF.Mk2A装備，ほかの各部隊はF.Mk3とF.Mk6の二つの型を装備している。このページと次ページの写真の機体は西ドイツのギッテルスロー空軍基地に駐留しているNo.19と92スコードロンのF.Mk2Aである。写真上は92スコードロン所属機，下は19スコードロンのF.Mk2Aで，胴体両側に装備しているのはファイアストリークAAM。

F. Mk2A of No. 19 Sq. Note the firestreak AAM. (Photo; AAPP)

Lightning of No.19 Sq. (Photo; AAPP)

写真上は19スコードロン所属のライトニングF.Mk2，下は92スコードロンの所属機。ライトニングのF.Mk2は，最初の生産型である1型のロールスロイスエイボン201ターボジェット・エンジン（推力5,103kg）をエイボン210に換装したもの。44機が生産されたが，そのうち30機はF.Mk6と同じように腹部の燃料タンクを大きくし，主翼の外翼前縁を延長，垂直尾翼上端を角型にして面積をふやすなどの改造をしており，これが写真のF.Mk2Aである。ギッテルスロー空軍基地の両スコードロンは，仮想敵機用にF.Mk2も数機保有している。

Lightning of No.92 Sq. (Photo; AAPP)

ハリアーT. Mk52とT. Mk2

Harrier T. Mk52 of Hawker Siddeley for demonstration use. Commercial designation.

〔上〕ホーカーシドレーが社有のデモ飛行用機として使っているハリアーT.Mk52（G-VTOL）。同機はイギリスの民間の登録記号を持つ機体としては最初のV/STOL機。T.Mk2Aと同じくペガサス102エンジンを装備しているが，胴体上面にADFアンテナを付けているのが本機の特徴。ダークアースとライトストーンの砂漠迷彩の塗装にしてあり，これまでブラジルの航空ショーなどに出場している。〔下〕複座練習型のハリアーT.Mk2（XW174）。写真の機体はT.Mk2の1号機で，テイル・コーンにスピン防止用のシュートを格納しており，生産型とは尾端の形状が異なっている。

Harrier T. Mk2 (XW174), two seat version.

川崎C-1
KAWASAKI C-1

"老兵" C-46の後継機として開発されたC-1輸送機。12月いっぱいで運用試験が終了し、1月からは試行運用として、いよいよ航空自衛隊の定期運航路線に登場する。本誌が入間基地を訪問したときは、ちょうど5号機（量産1号機）が納入されたばかりのところだった。

1st production version C-1 (No.5 aircraft) now at the JASDF Iruma AB. The C-1, successor of C-46, will be assigned to the JASDF inter-base regular service starting Jan. 1975.

左ページ下は着陸する5号機。このページ上と右は貨物の積み込み作業と大きく開かれた2号機の貨物扉。貨物扉には開発途中に写真に見えるような大きなフィンが取付けられた。

輸送航空団
005
005

世界に比類のないターボファン双発の戦術輸送機。C-1は主翼に前縁スラットと後縁のマルチスロッテッド・フラップという強力な高揚力装置をそなえ、離着陸性能がすぐれているのが特徴。高翼で主脚はバルジに収納、広い貨物室を確保しており、中型ながら日本の国情にあった高性能機で今後の活躍が期待される。

Noticeable is the excellent high lift device: the leading edge slot and multi-slotted flap of the trailing edge.

機材にめぐまれなかった輸送航空団。このC-1ではじめて本格的な実力のある翼を持つことになった。これまでのC-46やYS-11にくらべると、ゆったりとしたコクピット。計器は見やすく、各系統の配列もまとまっており、手順がらくになったとはパイロットの弁。右の写真で中央に丸く見えるのは、C-1で初めて装備された気象レーダスコープ。

Pilots applaud the wide cockpit, evident instrument panel and well-arranged system equipment. Seen in the center is the radar scope.

到着した新鋭RF-4E

百里基地

RF-4E NOW IN JAPAN

航空自衛隊がＲＦ-86Ｆの後継機として購入する新鋭偵察機ＲＦ-４Ｅの１、２号機が、去る12月３日、米空軍パイロットの手で空輸され、ハワイ、グァム島経由で、偵察飛行隊先遣隊のある百里基地に到着した。

Flown by USAF pilots, two RF-4E's arrived at Hyakuri JASDF base on Dec. 3, 1974. Note the four cameras.

ＲＦ-4Ｅは、写真でもわかるように、機首と胴体にカメラを４台装備している。ＲＦ-86Ｆに代って新しい偵察飛行隊が編成されるのは今年10月頃になる予定。

The first RF-4E rec. squadron will be organized in October 1975 replacing the F-86F.

フォート ニュース

去る12月1日、那覇基地において、第2回目の航空祭が行なわれた。
〔上〕会場上空を編隊飛行する南西混成航空団第207飛行隊のF-104J。
〔右〕海上自衛隊沖縄航空隊所属のP-2J対潜機。
〔下〕浜松基地から飛来したブルーインパルスのF-86F。航続距離が短かいため増加タンクを4本取付けているのに注意。
(Photos H.Hamano)

〔上〕英国航空の塗装をほどこし、運用試験を行なっている超音速旅客機コンコルド量産2号機。

〔下〕タイのエアサイアムに納入されたA 300 B。同機は生産第8号機で、ヨーロッパ域外への納入としては第1号機。

〔上〕フランスの航空会社エールフランスとエールアルプス両社が協同使用で就航しているコルベット06号機。

〔中〕アエロスパシャル社で製作されている、ＳＡ360ドーフィンヘリコプタ。

〔下〕アメリカ大陸の太平洋沿岸デモ飛行から帰り、シャルルドゴール空港で翼を休めるコンコルド02号機。

スナップ だより

（上）那覇基地上空を飛行中の米海兵隊第12航空基本訓練隊（ＶＴ-12）のＵＨ-1Ｅ。この機体で排気口が上向きに改造されている。（西宮市　浜野博司）。
（中）去る11月27日羽田空港に飛来した東ドイツのインターフルーク航空のＩℓ62（武蔵野市　井上　哲雄）。
（下）韓国に駐留していた空軍の第３戦術戦闘連隊が第８戦術戦闘連隊に代わった。写真は横田基地に飛来したもので、テイルレターは同じものを使用している（昭島市　山内裕之）。

■ダグラスC-47スカイトレイン■

DOUGLAS
C-47
SKYTRIN

C-47 in European theater, 1942

米陸軍空軍の輸送機として第2次大戦中にもっとも多く使われたのがこのC-47スカイトレイン。1942年7月1日に編成された空輸軍団〈ATC〉および同年夏から編成された兵員輸送軍団〈TCA〉の主力機として，物資および空挺隊員，兵員の輸送にあらゆる戦場をネットしている。1942年より開始されたインドから中国へのヒマラヤ越えの補給作戦，いわゆる“ハンプ”ルート作戦，43年7月のシシリー島空挺作戦，44年3月のビルマ進攻作戦での本機の活躍はめざましく，とくにビルマ進攻作戦では，兵員を満載したCG-4Aグライダーの曳航機としても使われた。英空軍に貸与されたダコタと共同であたった44年6月のノルマンディ上陸作戦では1,000機余のC-47が投入され，作戦当初の50時間で6万余の兵員を運ぶという空前の空輸作戦でもあった。

戦後も1970年まで“兵籍”にあり，朝鮮動乱やベトナム戦でも各種の任務に動員されたのはご承知のところである。

〔前ページ・上〕欧州戦線で作戦中のC-47。C-47は1941年に米陸軍空軍に装備され，翌42年いち早く大西洋を越えて欧州の戦場に投入された陸軍機の一つでもあった。〔下〕フロートをつけたC-47A-DK。米陸軍との契約のまま海軍用に造られた200機のうちの1機である。

戦場のC-47スカイトレイン

Ready for loading into the C-47 are fuel tanks for use by the ground force, to be airlifted to Gen. Patton's Command in front lines.

⬆ヨーロッパ戦線でパットン機甲師団の支援に出動したC-47。同師団各部隊の使用するガソリンを積み込んで前線へ空輸するところ。全面オリーブドラブの塗装に白文字"IH"の部隊記号。第9空軍れい下の第50空輸連隊(50thTCW)、第442空輸大隊(442ndTCG)、第306空輸中隊(360thTCS)の所属機。

C-53D Skytrooper, European theater

〔上〕ヨーロッパ戦線で兵員輸送に使われたC-53スカイトルーパーの1機。C-53は民間のDC-3を兵員輸送用にしたもので，乗降用扉が一つとなっているのが特徴。C-53はプラット・アンド・ホイットニイR-1830-92エンジン（1,200hp）×2。ダグラスでは221機を生産，そのうち20機は海軍に引渡されている。主翼全幅にスロッテド・フラップをつけたXC-53A（1機のみ），増槽と航法士の席を増設したC-53B，空挺隊員用の席を設けたC-53C，C-53Dがあったが，写真の機体はC-53Dの1機である。

〔下〕2次大戦で輸送部隊でいちばんの働き手であったC-47も，大戦末期のころはようやく性能にもおとろえをみせ，"グーニイ・バード"（まぬけ鳥）や"オールド・バケット・シート"（おんぼろの腰かけ）のニックネームをつけられたが，戦後も息の長い活躍をつづけることになる。写真の機体はベトナムの第7空軍に配備された1機である。

C-47 of 7th AF, Vietnam

RC-47D, Tansonhut, Vietnam, Oct. 1967

〔上〕ベトナム戦に投入されたC-47の1機。タンソンニュート飛行場から照明弾を積んで出撃するところで，夜戦用の明照弾投下作戦に使われたC-47は，RC-47Dと呼ばれた。1967年10月の撮影。

〔下〕同じくベトナム戦で照明弾を積込み中のRC-47D。心理作戦用の拡声機も見える。同機は心理作戦のビラ投下にも動員された。1967年5月の撮影。

RC-47D for psychological warfare, May 1967

C-47 in flight during mission in New Guinea.

［上］太平洋戦線で空輸任務に活躍した第5空軍のC-47の1機。"スワンプ・ラット"（沼池のねずみ）のニックネームと絵を画いている。雲の上に頂上が見えるのはニューギニアの山々。操縦席後方に書かれてある数字が部隊記号で、1から99の数字を採用していたのは第374と第317TCG（空輸大隊）であった。

［左］北アフリカ戦線に投入されたC-47。C-47は空輸・連絡のほか空挺作戦でも重要な役割りをはたしており，1943年7月のシシリー島作戦では4,381人，ノルマンデイ上陸作戦では6万人余の空挺部隊を降下させている。写真の機体はニックネームが"ドッド"。機首に空挺作戦出動のマークもつけている。機体の前に立っているのは中隊指揮官のホワード・ベッツ少佐。

Maj. Howard Betts, Sq. Commander, standing beside the C-47 at a base in North Africa.

C-47 with 7.62mm gun, 4th ACS, Vietnam, Nov. 1967

〔上・下〕ベトナム戦では，C-47に新しい任務が課せられた。ジェネラル・エレクトリック製の7.62㎜ミニガンを装備してのガンシープの役わりがそれである。呼称はAC-47D，胴体の側面に1分間の発射速度6,000発というミニガン3挺を装備して，ゲリラの拠点を強襲する攻撃機であった。1965年に初出撃，以後第4司令部中隊（4th ACS）に装備されて活躍している。写真上は胴体の側面に突き出たミニガン，下は機内のミニガンと弾薬である。上は1967年11月，下は66年1月の撮影である。

C-47B-DK Dakota of Australia AF

〔上〕オーストラリア空軍が装備したC-47B-DKダコタ。C-47は大戦中に米英のほかカナダ，オーストラリア，ニュージランドなど，連合国各空軍のほかソ連でも装備して広く使われているのはご承知のところ。オーストラリア空軍では1943年初めに3機のC-47を装備，以後C-47B，D型を100機余受領して戦後もそのまま物料や兵員輸送に使っている。写真の機体は65機装備されたC-47B-DKの1機で，同機にはA65-60からA65-124のシリアルが与えられている。〔下〕戦後タイ国空軍に供与されたC-47の1機。

FOKKER Dr.1 and SOPWITH CAMEL F.1

1/28 SCALE KIT

〔ソッピース・キャメルF.1〕

① ウイリアム・バーカー機
Flown by Major W. G. Barker.

② 英海軍航空隊第10中隊B飛行隊機
No. 10 Sqdn., B flight, RNAS.

③ 英海軍航空隊第9中隊機
No. 9 Sqdn., RNAS

④ 英海軍航空隊第10中隊A飛行隊機
No. 10 Sqdn., A flight, RNAS.

⑤ アメリカ戦艦テキサス搭載機
Flown of USS Texas, US Navy

フォッカーDr.1とソッピース・キャメルの塗装

(フォッカーDr.1)

⑥ 第12飛行中隊所属機
Jasta 12
⑦ リヒトホーフェン機
Flown by von Richthofen
⑧ 第12飛行中隊所属機
Jasta 12
⑨ 第11飛行中隊所属機
Jasta 11
⑩ 第11飛行中隊ベンツェル中尉機
Flown by Lt. Wenzel, Jasta

ハイモデリングのための
レベル資料集

ソッピース・キャメルF-1とフオッカーDr.1トリプレーン

Sopwith Camel F.1 and Fokker Dr.1

☆キットについて☆

第一次大戦の撃墜王機トリオとして1/28スケールのキット，フオッカーDr.1，ソッピース・キャメル，スパッド13のデラックス・キットがレベルから発売中であるが，今回塗装や組立説明書が一部改訂されて市場に出まわっている。このモデル３種は第一次大戦戦闘機キットでは傑作とされる精巧なデラックス版で，いずれも実機のイメージを最大限に発揮した決定版である。

Dr.1は実機と同じようにロータリー・エンジンがプロペラと同時に回転，詳細なコクピットや羽布張りの機体表面のデリケートな仕上りなど魅力あふれるモデルである。

いっぽうのライバル機キャメルも実感の出たロータリー・エンジンや機銃，コクピット，精巧な機体表面仕上げは抜群で，いずれもオールドファッションのパイロット人形付き。この人形がまた傑作といえるほどに優秀な仕上りであるのも嬉しい。古典機マニアでない人びとにも，このフライング・マシーンの美的構成の良さを，ぜひ味わっていただきたいものである。

☆塗装について☆

ソッピース・キャメルF.1

図のように楽しいマーキングの機体があり，キット附属のデカルはウイリアム・バーカー（後期）のものが付いている。図①は同じくバーカー機であるが，胴体の帯が少い点に差がある機体で，上側面は全面カーキーグリーン，下面はバフ仕上げの塗装。

以下②～⑤の機体もカーキーグリーンと下面バフの基本塗装，支柱はウッドブラウンのものもあり木目の見えるニス仕上げである。

フォッカーDr.1

撃墜王リヒトホーフェンの愛機として有名な機体で，このリヒトホーフェン機を撃墜したのがキャメルF.1のブラウン大尉機，この両機をそろえることにも意味がある。図⑦は空の赤鬼と恐れられたリヒトホーフェン機。（注：この機体ナンバーのものは図①や⑬のようにダークグリーンのしま塗装との説もある）図⑥⑧⑨⑩の機体はダークグリーンであるが，機体の下地がかすれて塗り残されたような塗装で，側面は上下方向のシマ目，胴の上は斜めのシマ目。翼上面は前後方向のシマ目塗りである。機体の下地はアルバトロスD.IIIのようなモザイクの多色プリント羽布張りといわれている。色彩の点では正確には不明というのが正しいがダークグリーン⑰が適当。下面はライトブルー⑳を応用すればよいだろう。図⑬の機体の機首後部はシルバー（アルミ色）。図⑧の機首は白半つや消しである。

（イラストと解説・橋本喜久男）

← ソッピース　キャメルF.1。米陸軍派遣隊の装備機。
Camel F.1 of U.S. Air Service.

↑ フォッカーDr.1。復元された機体で，第2戦闘飛行隊塗装にしている。
Restored Fokker Dr.1 of Jasta II painting.

Kit :
WWI trio ACE planes, Fokker Dr.1, Sopwith Camel and Spad 13, are now on sale from Revell in its deluxe 1/28 scale series. Revell recently renewed the paint hints to these popular WWI trio kits.
Dr.1 : The rotary engine turns with the propeller, similar to the real aircraft. Detailed copied cockpit, delicate copy of the cloth surfaces represent faithfully the German masterpiece during WWI.
Camel : Needless to say about the exquisite workmanship in the rotary engine, guns, cockpit and airframe finish, the Revell kit is accompanied with the old-fashioned pilot doll. The doll is so excellent that the people who are not particularily interested in the WWI planes will surely feel "wonderful" with its artistic structure.
Painting :
As seen in the illustrations, you can enjoy the marking variety. The Revell kit has the decal of the plane flown by Maj. William G. Barker.
Fig.1 is the plane flown by Maj. Barker. Totally painted in khaki green with buff finished undersurfaces. Fig.2 and Fig.5 are also in standard camouflage finish of khaki green and buff. Some struts are finished in wood brown varnish.
The Fokker Dr.1 is well-known plane flown by Manfred von Richthofen. It is also historically interest that this plane was shot down by the F.1 Camel flown by Capt. Roy Brown. In this regards, it is recommendable to get the Sopwith Camel F.1 and Fokker Dr.1 at the same time.
Fig.7 is the Richthofen plane, known as the "Sky Devil". (Note : an opinion says that the plane of this number was in dark green streak paint scheme like that of Fig.1 or Fig.10.)
Figs.6, 8, 9 and 10, dark green, have vertical streaks on the sides of the fuselage and slanting streaks on the top.
It is said that the foundation was clothed in polychromy mosaic painting pattern. Correct coloring is not known, but Revell Color 17, dark green, seems to be adequate. RC-20, light blue is good for the under-surfaces. Fig.8's nose is non-glare white, while the rear part of the Fig.10's nose is silver (aluminum).
(Illustration with commentary by Kikuo Hashimoto)

Revell Color for the Dr.1 and Camel :
R.C. No.

1	White	3	Red
5	Blue	8	Silver
10	Copper	17	Dark green
20	Light blue	28	Black iron
30	Flat base	33	Anti-glare black
34	Sky blue	43	Wood brown
45	Sail color	54	Khaki green

ハインケル He111 爆撃機

双発のぶきみな不調和音をひびかせてイギリス本土を襲ったハインケルＨｅ111爆撃機。大戦後半は老旧機となってかげをひそめたが、緒戦ではＪｕ87とともに、連合軍にもっとも恐れられたルフトバッフェの翼であった。

Ｈｅ111は双発の高速輸送機から発達した爆撃機。最初にドイツ空軍に就役したＢ型のほかに、Ｅ、Ｐ、Ｈ、Ｒと各種のバリエーションが造られている。前ページとこのページはＨｅ111Ｈ-16で、出撃中と生産工場の模様。

〔上〕He111H-16はHシリーズでH-3、H-6につづく三つ目の主要生産型。ユモ 211F-2エンジン（1,350HP）を積んで、防御火器を強化した型である。写真はその1機で、機首の透明風防、エンジン・ナセル上と下のキャブレターとラジエターの吸気口、排気管の細部などがよくわかる。〔下〕魚雷攻撃型のHe111H-6。1941年末から部隊に配備されたH-6は、7.9mmMG15機銃6挺、20mmMGFF機関砲1門の防御火器を持ち、写真のように765kg LT　F5b魚雷2発を装備した。

このページと次ページも、実戦部隊で活躍中のＨｅ111H-16。上の写真では腹部のゴンドラ式銃塔がよくわかるが、これはP型から装備されたもので、H-16ではここに前後方向きにＭＧ15機関銃２挺を装備した。写真下はＨｅ 111の爆弾倉に積み込まれるＳＣ50（110 lb）爆弾。H-16はこのＳＣ50爆弾を爆弾倉内に32発積むことができた。右上はその投下の瞬間。英本土上空で爆撃中のシーンである。

11H-16 bombers in action. ⬆Bombing runs
r England during Battle of Britain.

写真上は胴体下にＳＣ 500爆弾３発を吊して出撃するＨｅ111H-16。写真下はナセルの外板をはずしてユモ211 F-2エンジンの整備。乗員の一人が後方にスライドする乗降口扉をあけて身をのり出している。ナセル後方の主翼付根部分は排気によごれ、歴戦のＨｅ111の１機。Ｈｅ111のＨ-16型は、のちにフィゼラーＦｉ 103ミサイル（Ｖ-1）積載用のＨ-21（両主翼下に１基づつ装備）に改造され、ロンドン攻撃に出動している。

日本陸軍機写真集

JAPANESE ARMY AIRCRAFT IN WWII

Ki44 SHOKI of 27th Independent Fighter Sqdn., Chofu Airfield, Summer 1942.

調布飛行場で撮影した独立飛行第27中隊の2式単戦"鍾馗"。昭和17年夏、同中隊がビルマ方面の作戦を終えてえて内地に帰還したころのもので、この後まもなく柏飛行場に移駐、東京地区防空の任についた。

Army Type 97 Heavy Bomber (Ki21-I Otsu), 1941 ⬆

Army Type 97 Heavy Bomber (Ki21-II) in Southern Pacific theater ➡

今回は2次大戦陸軍機のうち、最近あまり採りあげられたことのない珍らしいものを選んでご紹介することにしよう。

〔上2枚〕93式重爆の後継として昭和13年初めから量産された97式重爆撃機。尾部や胴体両側方に防御機銃を装備した97重の1型乙であるが、2枚の写真とも昭和16年ごろに公表されたもので、機銃は消されている。

〔右〕1型のハ5改（離昇出力950HP）エンジンをハ101（離昇出力1,500HP）に換装して、側方銃を2挺ずつに増強した97式重爆2型。97式重爆は開戦初頭から南方戦線に送られ、マレー、フィリピン、ビルマ方面の爆撃に活躍、大戦末期には旧式化して消耗も多かったが、後方への連絡輸送にも使われ、終戦まで第一線にとどまった。写真下は南方戦線で活躍中の1機。林のなかの掩体から滑走路に向うところであろう。右側の掩体のなかにも97重爆の1機が見える。

Type 100 Commandant Reconnaissance Plane (Ki46II) of No. 82 SENTAI

〔上〕新司偵の名で呼ばれた陸軍の傑作機。100式司令部偵察機。太平洋戦緒戦の"戦略偵察"の活躍はおなじみのところ。敵戦闘機をまく快速、パス・ファインダーや洋上索敵などにも使われた。写真の機体は尾翼に虎のマークを画いた飛行第82戦隊所属の2型である。同戦隊は、昭和19年10月に漢口で編成されて、中国大陸で作戦、京城で終戦を迎えた偵察部隊。〔右上〕終戦直後、米軍のマークをつけて追浜飛行場に運ばれた2式単戦"鍾馗"。

Ki44 SHOKI parking at Oppama Airfield, Japan, sometime in October thr. December 1945.

〔下〕終戦時に東京近郊の飛行場（成増と思われる）に集められた日本陸海軍機。前列は左から飛行第102戦隊の97戦、飛行第52戦隊の“疾風”,飛行47戦隊の“疾風”3機とも尾翼のマークがはっきりわかって興味ぶかい。後方には97戦と海軍の“白菊”機作錬も見える。左側に見えるのは離陸中の米軍のL-4グラスホッパー。写真は1945年10月8日の撮影。

Wrecked Japanese warplanes, Narimasu Airfield, Tokyo, October 1945. Front line, left to right: Ki27 (No. 102 SENTAI), Ki84 (No. 52 SENTAI), Ki84 (No. 52 SENTAI) and Ki84 (No. 47 SENTAI).

ドイツ軍用機写真集 ⑧

MESSERSCHMITT Me210 & FOCKE-WULF Fw189

Me210とFw189

前号につづいてMe210複座戦闘機の鮮明なスナップ。前号と同じく1942年夏にオランダで編成された第210実験飛行中隊でテスト中のMe210A-1である。A-1型はMe210の最初の生産型で、20mmのMG151/20機関砲2門と7.9mmMG17機銃2挺を装備した駆逐機であった。1941年初めから部隊に引渡され、同年末に第1重戦闘航空団第2連隊（II／ZG.1）に装備されて東部戦線でデビューしている。左下写真はジャッキ・アップして機軸を水平にし、機銃の発射テスト中のもので、右側後方に標的が見える。下の写真は燃料補給中のシーンである。

〔上〕攻撃・偵察から連絡・輸送と幅広く使われたドイツ空軍の双胴の多用途機フォッケウルフＦｗ189Ａ-2。"フライング・アイ" のニックネームが示すように、中央胴体は前後方が見渡せる視界の良い透明風防を持った支援機で、Ａ-2では 7.9ｍｍＭＧ81機銃２連装のＭＧ81Ｚを背部と胴体ナセルに装備していた。写真は整備中のもので、円錐状の透明な中央胴体後部がよくわかる。〔下〕ドイツ空軍が使用した1,686-ｌｂの航空魚雷ＬＴ　Ｆ56のクローズアップ。台車に載せてスクリューを回転させてテストしているところである。

Focke-Wulf Fw189

LTF56 torpedo

GRUMMAN

アベンジャー艦攻

2次大戦のアメリカ軍用機 ⑧

TBM-3Es of VMTB-232, MAG-53 in mission flights over Okinawa, April 1945

TBM-3Es of VMTB-232 ready to start bombing runs, south of Okinawa, April 1945.

今回は米海軍艦攻の主力グラマン・アベンジャーの出撃中のショット。前ページは1945年４月、主翼下に５インチＨＶＡＲロケット弾を装備して沖縄本島の攻撃に向うＴＢＭ-3Ｅの３機編隊。米海兵第33航空大隊第 232雷・爆撃中隊の所属機である。写真上も同じく第232雷・爆撃中隊のＴＢＭ-3Ｅで、沖縄上空を飛行中。ＴＢＭ-3はアベンジャーの後期の型で、主翼下にロケット弾のほか、落下増槽、レーダーを装備することができた。写真はロケット弾と爆弾で日本軍陣地の攻撃に出動したときのものである。

写真下は1945年９月３日、ホノルル上空の戦勝祝賀飛行パレードに参加した海兵隊のアベンジャー。両主翼下に吊り下げているのはＡＴ-5Ａ／ＡＰＳ-4レーダー・ユニット。

Marine Avengers heading towards Honolulu to participate in the V-J Day parade, 3 Sept. 1945.

McDonnell Douglas DC-8-62

〔上〕フィンランド航空が1969年に1号機を受領したマクダネル・ダグラスDC-8-62。乗客185－189人乗りだが同航空では39,000kg積載の貨物機としても使っている。現在同機の保有機数は3機。〔下〕最新鋭のワイドボデイ・ジェットDC-10-30。現在2機を受領して、西ヨーロッパの幹線航路に就役している。

上記の2機以外にフィンランド航空が現在保有している飛行機はDC-9-14（6機）、DC-9-15MC（2機）、スーパー・カラベル（8機）、メトロポリタン（5機）の各機種で、19の空港を結ぶ国内各路線およびロンドン、アムステルダム、デュセルドルフ、フランクフルトの西ヨーロッパ主要都市それにアメリカへの国際路線をカバーしている。

McDonnell Douglas DC-10-30

Ki43II-Otsu HAYABUSA

クラークフィールドの50年

FIFTY YEARS OF CLARK FIELD

Captured Japanese Army and Navy aircraft:
Ki45Kai TORYU fighter and TENZAN Attack-bomber

Consolidated F-7B photo-rec. plane, Clark Field, 1946

1945年1月26日、フォート・ストッツェンベルグは米第6陸軍によって日本軍の手から解放されて、ふたたびクラーク・フィールドと命名され、翌1946年には米陸軍第13空軍が司令部を移した。そして翌47年には米空軍が独立、クラークは新生米空軍の東方の一翼をになう重要な基地となった。

〔左上〕戦利品として、戦後1958年ごろまで同基地に展示されていた雷2型乙。同機はのちに撤去命令が出されスクラップにされた。〔左下〕終戦のころクラークに置去りにされた日本の軍用機。左は複戦"屠龍"、右は"天山"艦攻である。"屠龍"は昭和19年2月にクラークに派遣された飛行第45戦隊の所属機、"天山"は第1001航空隊の所属機である。〔上・下〕1946年4月29日、同基地への着陸に失敗したコンソリデーテッドF-7B。F-7はB-24の写真偵察型で、写真の機体は第24戦闘情報中隊（24th CMS）所属である。

Consolidated OA-10 amphibian, Clark Field, 1946

（上）これも終戦翌年の1946年のクラーク・フィールドで、同基地に派遣されていたコンソリデーテッドＯＡ-1水陸両用機。ＯＡ-10はＰＢＹ-5カタリナの陸軍空軍型で大戦中から戦後にかけて、捜索・救難などに使われている。両主翼に見える懸吊架は投下救命いかだ用。主翼にはレーダー・アンテナも装備している。クラーク・フィールドは、東洋一の敷地をほこる広大な飛行場。左手ハンガーのはるか後方には4発のＢ-29も駐機している。

（下）これも1946年のクラーク・フィールドの一隅。サルベージのために集められたＢ-24で、すべて損傷を負って飛行不能となった機体。

B-24s in a salvage yard at Clark Field, 1946

Boeing F-9C long-range photo-rec. plane, Clark Field, 1951

〔上〕終戦6年目の1951年のクラーク基地。ちょうど朝鮮動乱のころで、同基地に駐留していた航空部隊は、動乱ぼっ発の前年50年に北方へ移動したが、中継・後方支援基地となったクラークには、動乱終結まで各種の空軍機が翼を休めた。写真の機体はF-9C写真偵察機。F-9はB-17爆撃機改造の長距離写真偵察機。1942年から44年にかけて、B-17F改造のF-9AとB、B-17G改造のF-9Cの数10機が機首と爆弾倉部にカメラを積んで、太平洋の戦場を飛びまわった。戦後同偵察型は一時RB-17Gとも呼ばれている。〔下〕これも1946年にクラークに姿を見せたビーチC-45F輸送機。C-45Fは7座席が設けられた軽輸送機である。

Beech C-45F light transport